



繪本甲越軍記三編

五

2258
29



門遠 13
2258
卷 29

江清



繪本甲越軍記卷之五

目録

長尾謙信押退口之事

越中之間者帰々委細と言圖

甲州使番勇猛之圖

板垣小山田怠軍を責給ふ事

板垣信里武田家と服事并曲測在左邊之事

曲測多吉切力之圖

曲測強勇之法之圖

日越軍記三編卷五目録



敵 へ 清元

繪本甲絨軍記三編卷之五

長尾謙信抽退の事

堤より蟻穴より貫氣へ針芒を張る小笠原大膳太夫長持法
 禰寺表の二戦は武田の堅陣と砕き二三の備も敗り惣敗れ
 及んとてより公見より高小笠原の軍伍を虚して敵を追所
 利左衛門尉晴吉が一備小村を却り大敗軍とありて引退く
 此時拵梗が原に備へる板垣弥治郎小山田左兵衛尉討出て攻
 る小笠原家此時滅亡とせき小板垣弥二郎信里急ぐ長尾
 家へ密通の事有まば急病と搦へるお出されば小笠原勢予に
 命と助く松本の城を引入防禦の備とありて多斯く武田
 晴信より諸將を觸られ此後小笠原松本へ乱入し小笠原と美濃小



板垣弥治郎君と眼を退出する圖



攻^つてとべしとつる不^ふ長尾景虎^{ながおのかげとら}が軍^つに勅^{とら}作^{さく}と見^みせしとんと
 先^ま達^{だち}と結^{むす}登^{のぼ}城^{しろ}中^{ちゆう}、終^つる間^ま者^{もの}小幡^{こぼた}弥^や三^{さん}左衛門^{さゑもん}尉^{ゑい}僧^{そう}大益^{だいてき}は二
 人^に立^た降^{くだ}り中^{ちゆう}たりと某^{たれ}寺^{てら}安^{やす}と愛^{あい}して結^{むす}登^{のぼ}城^{しろ}中^{ちゆう}と純^{じゆん}綱^{つな}一^{いつ}
 景^{かげ}虎^こが合^あ戦^{せん}の様^{よう}と結^{むす}く候^{こう}ひは景^{かげ}虎^こが軍^つの採^し當^{たう}家^け小^こ向^{むか}つと
 此^こ軍^つ立^たと格^{かく}別^{べつ}ありて唯^{ただ}合^あ戦^{せん}と大^{だい}事^じ小^こ一^{いつ}好^{こう}と見^みゆと敵^{てき}は
 勝^{かち}成^{なり}と半^{はん}達^{だち}は埋^{うり}伏^{ふく}の謀^{まう}斗^ぶと信^{しん}け不^ふ意^い小^こ起^{おこ}と敵^{てき}と切^き向^{むか}し
 軍^つ勢^{せい}は引^ひち手足^{てあし}と信^{しん}ふ異^いあはれ未^まも勝^{かち}く深^{ふか}く弓^{ゆみ}
 矢^やと取^とりこれいと大^{だい}益^{えき}と以^{もつ}て澄^す人^{ひと}と景^{かげ}虎^こは西^{せい}園^{えん}との合^あ
 戦^{せん}は次^{つぎ}弟^{てい}と逐^おつと中^{ちゆう}くれは山^{やま}本^{ほん}勘^{かん}助^{すけ}と拍^{ちやく}と景^{かげ}虎^こが雄^{ゆう}智^ち
 感^{かん}とこれに結^{むす}系^{けい}虎^こと名^な將^{しやう}ありと存^{ぞん}ふ小^こ愚^ぐ安^{あん}は亦^{また}一^{いつ}も遠^{とほ}は
 らぬあり其^{その}智^ちも景^{かげ}虎^こ我^{われ}君^{きみ}の弓^{ゆみ}矢^やと熟^{じやく}く覺^{かく}り深^{ふか}く剛^{かう}也^{なり}

と怖^{おそ}き尋^{たづ}常^{じやう}又^{また}戦^{せん}ひくも勝^{かち}利^りはるるが如^{ごと}く堅^{かた}陣^{ぢん}と
 破^{やぶ}らんと欲^{ほつ}る武^ぶ略^{りやく}と專^{せん}一^{いつ}我^{われ}が軍^つと孔^{こう}が如^{ごと}く一^{いつ}も
 孔^{こう}とに唯^{ただ}敵^{てき}と名^なと尔^{なん}と謀^{まう}畧^{りやく}と殺^{ころ}す却^{かへ}て敵^{てき}の意^いは
 がむ有^ある二^に戦^{せん}と心^{こころ}掛^かと覺^{かく}へは景^{かげ}虎^こが心^{こころ}程^{ほど}と亦^{また}一^{いつ}も小^こ愚^ぐ
 令^{しやう}負^おて我^{われ}君^{きみ}負^おると覺^{かく}て恥^ちあらばと思^{おも}つるの心^{こころ}は
 白^{しろ}あり必^{かなら}定^{ぢやう}近^{ぢん}年^{ねん}に肉^{にく}小^こを思^{おも}ひ切^きらるる奮^{ふん}戦^{せん}と仕^しえけらば
 それと悔^{くわい}つとわいもらふ又^{また}服^{ふく}と付^つけおべらば景^{かげ}虎^こが武^ぶ
 畧^{りやく}と對^{たい}せん事^じを唯^{ただ}陣^{ぢん}法^{ぽう}の宜^{よろ}しむを世^よ侍^{しやく}るべしとやれれば晴^は
 信^{しん}云^い山^{やま}本^{ほん}が遠^{とほ}斗^ぶと感^{かん}と終^つひ我^{われ}もた社^{しゃ}を思^{おも}ひつれまこと
 若^わ小^こ寺^{てら}者^{もの}の古^こ今^{いま}稀^{まれ}ある名^な將^{しやう}あり我^{われ}おまゆら不^ふ意^いありと
 馬^{うま}場^ば民^{たみ}部^ぶの埔^ぼ内^{うち}を修^{しゆ}理^り正^{せい}等^{とう}に老^{らう}成^{じやう}と長^{なが}く其^{その}由^{よし}と終^つる

珍ひ景虎近々出張あり人跡景虎が多と大事小せり有
 不は敵後勢海野平は出張あり中注進ありこれ敵後勢
 の出張捨棄き敵又あり比とて松本乱入と打捨其日法福寺
 表と引拂を珍ひ海野味と越え上回とさ終葉麻子川の
 此方ある所が宿陣と取捨へ敵後勢も九月二十八日掛表
 へ備と出し九月二十八日より十月十日まで對陣あり日足
 折に出し旗槍と打掛くちと矢と射りけて退れ或は先備
 の歩卒出く日くの小迫合のこ小くゆきと暮る敵戦ひある
 久々小敵富源四郎春日源又郎の兩人と睦の指物使者
 十月二日飲留兵部少輔が備は使小あり折前敵留が先
 勢と敵後方小条丹後守が先勢と迫合有る久々えて兩人

出敵

敵中へ進入首二級と斬る本陣は序り同日又敵留が備へは
 使は多り序りんとて敵留源四郎春日源五郎は射り
 以彼方本陣は敵式三十人斗味方近く居い渠等と遊り
 序り如何と細く源五郎を以て兩人を以て三十人を以て
 居る中へ味と系入切先と也て討たれは案違へど敵後
 勢兩人が勇威は恐れ蜘蛛の子と教むが如く我陣は逃序り
 時も兩人首二級死し得る本陣小を序り翌日の早天又兩人先
 備小山岡備中守が備へは使は多りまより敵の陣近は候
 出たりは案同尾張守の陣よりえり歩卒二十餘人馳出取圍んで
 討んとて飲留春日眼と怒りし折りと喚き四角八方小羅を
 程は歩卒多し時つづき引返る時又首二級死と取て本陣は

甲斐軍記三編卷五

三

厚りりれは晴信渠ホゴ武勇と感し給ひ感状は慶養と賜ひ
 上兩人は討ひ給ひ使番と我令と諸陣小觸知し身候に敵
 所備を勃静に見積り給ふれば軽く一己の働にん掛へ
 此と作と時小景虎より平賀惣助と使して明日有無の合戦
 と遂べき由中より十日早天越後方中より先陣小条丹後と新番
 因尾法重長尾平八郎彌訪部治郎右衛門二陣を掃討和泉守耳
 相近守新津丹波高松内膳藤本の先小本庄弥三郎新
 庄左衛門中条誠宗等諸將後陣を村上左衛門義清長尾越
 前守正景あり甲州方中より先陣飯沼兵部小山田信中守若田下
 野守お本布多清重目甚八藤本の所備中より山本勘助諸將用
 事後等諸將後陣中より清原兼定の所備中より山本勘助諸將用

紅
 紅
 紅

あり兩陣既と押出とすは景虎と如花威の鎧は同毛の兜と着
 黒の馬小金覆輪の鞍蓋は紅の厚総と掛せ近後十人宇佐兵
 駿河守と後小条が侍入給ひて甲州方と身候あり甲州に大將
 晴信も紅裳法の獲は法性の兜と着指毛のる小將給へ
 と蓋せ山本勘助内藤終理心と後近後十三人小山田が侍
 又入給ひ越後勢に体と見積給ひ山本内藤と皆く軍議あり
 人其子細とまぶらばやて山本勘助系廻り先勢と探替旗本
 所備あり迄部養化守曾根七郎左衛門五郎左衛門村
 市川傳又郎等侍小勢とて亦も若子の者も先へ
 飯沼小山田若田等が勢と二の宴は立替々家と景虎熟見
 智謀兼備の名將とれば晴信が胸慮と早く察し急軍使と

甲越軍記三編卷五

旗

虫
虫

諸備に馳く引揚る其体も足と遣ふは異あはれ先使に相へ
らる小桑母後守掃崎和泉守其指をいさ小村上た衛門長尾誠
宗を以てお加へ八使と後殿をいし一掛の切不とおくり是と見て
武田の先將松部兼光も曾根七郎を落安部五郎左内尉市
川傳五郎長尾勢が引退くどきあわくと馳せしが飲馬小山田
芦田が勢も松部曾根等小先と敵もまどと共と叫び長尾誠宗
守正景がの敵して使へし不逃まき共と切かる爰も小幡山城を
点盛が小山幡惣七郎と蛙の指物十二騎の内ありんか飲馬を
部次捕ら使は軍仗してありし此程用組の飲馬春日も夜
くさ名せしれいと念合と思ひし不あればいさで常も形像を
き一番小馬と乗出し縛きの鐘着る馬武者の引くるは追付懐
え

刺

臂とのべく彼武者が総角と背後より引つらしか小幡にせし程
に我來る馬の鞍の茶桶小引付られぬもあつる者あればぬと
轉じて小幡小幡と組合別力と出して組合あつる両馬が間
為と上よりありし小幡あり互小武三度跳入りたる物七郎見お
伎流と取し押へ腰刀とにげりし首と搔んとする不と敵もあれ
あつるるも指と抜ひく小幡が草摺の紐れと續きぬ小刺程は
三刀中ぞ刺しつらり物七郎是と物共せば腰刀と抜き見し首
と捨落は州時甲州勢も早越後勢も討かるる火花と敵はし
く戦ふ不と新谷田尾張守横槍と入小山田芦田と討合せば掃
崎和泉守も飲馬が勢と終切らんと探小探と討まれば武田方
討まり負ふ早越人といふと見えし甲州方の實は備へる軍を
刺

甲州軍記三編卷五



甲州の
使番
勇猛
乃國



下

嘯と叫んぐ加人ところを見く餘留小山田又十餘人と具して馳
 あり歌味方中へ馬と系入軽くと味方と引揚り俸甚見事
 見くられ長尾正系其拳動とて軍と止め徐くと引く
 景虎が抽退口の車緒説多端とて皆後以の懸説
 しく採用ゆふ小豆らび突と兩名將が軍急智謀と机上小
 り謀り知ふべらんや世書と世の小説妄誕の想像く文
 華と能く記と教の物小あらば高坂彈正が軍濫又原き
 是は諸家の古記録と校正して其正き説と記しこれ
 終らりき後と省去く記すべ
 晴信 責板垣小山田自軍と責務の事
 却深小山田九兵衛尉と板垣孫治郎と拮据が系陣一々

魚

魚

法福寺合戦は小笠原大膳太夫長時と接し討つ小笠原家を
 滅さんくや當り小あくと板垣小出陣と初れ其軍と動ふは小笠
 原放小と聞くと直に付入ると驚れとも板垣病と称し出
 されば九兵衛尉一よりして働んとはこれとも原加賀守崎田外紀は
 割せられ當り應りると空して強者たりり世度晴信拮据が
 系合戦果て後諸將の軍功といふは決は拮据が系の諸将の意
 軍と傍り強ひ令九統系守春日源五郎飯留源四郎三人は
 命として強ひ上下の町人百姓等十人許と塩尻峠番多社長
 坂九兵衛尉が同心三三騎と石連あえり又彼地の風定と強
 聞屋あえり二十人元頭一騎又中間頭一騎と拮据強ひて
 強ひ遣され彼地の掠子と妻くはせ強ひ彼町人百姓と

甲斐軍記三編卷五

武三人宛四度御旗屋より拵扱が原筋へ作付られし先
 板垣二の先小山岡系小系崎田等が搦子と連小沖尋有て等者
 と等々告と口と善悪を扱扱者ら二三日留りて後引出その
 湯めて放ら等され扱扱小山岡はお副将の動靜と尋尋ひ次は小山岡九兵衛
 使の原加賀守とられ兩將の動靜と尋尋ひ次は小山岡九兵衛
 尉と常の間へられ金丸飲旨春日共三人と以て尋尋られ兵軍と
 責強へ小山岡系より大將沖出陣の御某等拵扱が系
 より軍と出し退き搦子より一時小乱入ひり小系系系家二時
 掌扱ありしと思惟し扱扱弥治郎と勅ありしも支度と拵
 七日まで出陣停ざる也退き假使付ひ共其後病と稱し
 て出陣仕らば是れ是れ及て某一と以て働ひひんと支度仕れど

原加賀守崎田外紀堅く制して出陣と免さば強く申ひり
 共假令此儀と制して某等後日死刑小引り共討ひしに
 中より心をあらば軍と止め九月十八日下瀬坊小系系有付り此
 地にて空す日と送り瀬島は小至る塩尻迄存出ひ系海野系
 小沖出陣申し長尾と沖對陣の報死依系系彈心とる出田
 飛脚と申し中裁し以然る不飲富兵部少捕より下瀬坊
 中を引退すべし青君の命と傳へ小系系引取ひ系系
 迹々れば小山岡が系系届金丸春日三人が報訪しそ等々次
 系崎岡が上町人百姓が告りと違へれば小山岡たえ藩尉の別
 く沖崎系系那内小沖陣御作付扱扱弥治郎が違心の事
 風流小崎傳聞系系一系々も父駿河守信形が系系裁と思ひ出

甲斐軍記三編卷五

敵

られて免角の儀及び先其分して置れ給ふ
板垣信里武田家河邊事并曲淵庄在在事
抑此板垣弥治郎信里を代へ武田家は仕へ父駿河守信勝は云
天文十六年上回系して討死せし者我の吉老よりしが其子弥
治郎に至るお傳の武田家と云くむむら小長尾家は通じり子
細と尋ふは板垣が細は曲淵庄在在事といふ者あり甲州身
延属材の農家吉六が子して知名と多吉とのふせ等て能
力強く大徳不敵の荒重子して四五歳の時より同ト村の小兒
と争ふは地物れより五六歳も長びけ者物物の屑もせは難
物擲お奉と云ておられ忽ち眩倒しつゝ父おを多吉が大
膽ありと物憂こ中より種く折檻とれ共強む十二の比を

檻

敵

近在の邊と者も彼童子と怖れ身延村してハ不敵の事と云
ざんき其年百回約兩度づい早魁して田畑是が為小拵んとは一村
僅の小川と堰と溝あり田と春ふ此去六が田は續くは在在事あり
此里に廿貫強欲の者して夜更く人静ると伺ひ夜毎に已が
田小拵去六が田に入る水と堰あり已が田は入る小より去六が田の水
溜り給赤と拵んとは里にが仕業ある事を知ると拵も村長が
威を畏く拒む事強はざんき多吉憎れ事小思ひ夜更く田より
悉びく伺ふも拵は彼里に己が田は思ひます水と物思ひます
是と云るよりと云く拵は飛で出彼里に引廻り里にの身して
水と盗し憎むと云く引彼に泥中小擲力小拵は任
おられ懐むべし彼里正々大か小擲ぬれ半身土中埋む其事

摺

甲州軍記三編巻五



日武軍記三卷五



曲測 まがら
 幼力 こぢり
 多吉 たきち
 園 のり

日武軍記三卷五

相 盾

息絶死より多き者收活とて思へども村長と殺しつゝ罪を
しとこれより甲府より走つ伯母聲と頼りて隠れ居りし彼伯母聲
を酒商人より近邊の溢れ者式を家中に下僕等渠が温順あり
小付の時とあり酒と香く價と債つと強く債と乞へ眼と
罵つと却る主と打擲とつ事なかり多き此家小付と
窮る溢れ者酒と呑めつ傷は多し渠渠等が向と白眼と價
と債つと降る者も信とへつ債と乞ふ事強あり溢れ者等へ多
吉の十三三歳をとりあり心慢り伶俐あり小童所ありと
振と打人ととるよと引つ半角も高に大男と大地は投げ引
かむと頭と走らう小打酒代と出さどんばお殺しつれんども
しつべ強かと慢らう溢れ者も多き吉小踏れて息も通ふと能

602 敵 旗

ほど價と出して喰らもあり優あり者々衣服と利き赤裸よせられ
と逃れられれば皆多き吉が怪力あり思は首と抱へ一人も回と出と者
あし板垣駿河守折と通つ掛は此体と見え多き吉が怪力を愛し
彼酒をよんかき多き吉と抱へ鳥若と名と更め草履履とあ
る若板垣は仕へる成長とる小至る板垣は従ふと戰場み出
度と高名と頼りてある天文十三年小田井合戦の時板垣駿河
守飯富兵部が捕先佐より戦ふは小田井が降先尖くらんも
それ板垣は紅色あむい見へりしが廣瀬郷左門猪子
文藏鎗と入烈く戦ひ敵と討事茶と切が如く働たりとて
科傳右衛門彼も若く先を争ひ廣瀬猪子小續はて同く
陰に入し猛勢鬼神と欺死向敵と難事麻と落し

日武軍記三編卷五

旗

弥進人々戦へば小田井城是は解易し突山明されて城中小田入
 ころ大將時信合戦の勦撃とん切給ひ板垣駿河も飢富玄部お
 浦の備の上小内若終理心集人武田道遠朝と指し給ひ是は
 籠本の壯士と添又千人の人救と以り小田井が城とまてしと定め
 路小此時廣瀬郷九信門進し出我等未だ馬と持されば働自
 在あらばは程小今日城將小田井が城とまてしし金の馬遣うけし
 馬被は逸物とて明日城責あらんと思て某の城の高
 名あをりし小田井の馬と取ら某とて告げし若
 板垣が後の遙下小ありしがはくくと進し出廣瀬版を城將が
 馬と取らし路小や事と城將の首と取らまふべしと駿河守
 断しつりつりたれば並居る諸將兩人が大言と歎笑し渠等

攻

朝

敵

僅に力多と鼻小うけ明日の合戦敵時方勝放も多うさう小大將が
 馬と取首と取らんといふ荒言は可笑れ自然首尾あらざる
 時々今迄の荒言を挿も皆馬餅とありて男を多し言ひ
 翌日合戦既し始り戦ひ半端ありし時山本助助が謀略とて
 城中小火と放らるれば城將小田井又六郎同治郎九信門は
 大に怒り又六郎と後兵七拾餘人と前後より大半月又黒系威
 の遣と着し甲遠くと討て討て討て出漏巻とて武田勢へ
 咄と喚り討てかゝる武田方と小田井と討んと黒と白と戦へ
 別勇は又六郎死と交しと戦ひあれば勇ま日比二十倍と猛
 虎の群羊の中と種ひ追ふが如く敵の首二三十と搦切兼大將時信
 公橋本と目小うけて討てゑる廣瀬郷九信門鳥居の兩人は城將

又六郎が討出ると空より空とけり中にも鳥若ら主るに難
 る小若も味方中と押さ小田井とるるより組人ぞ討んと馳寄
 べ又六郎も若と一刀に討倒さんと大さかと閃して端と切らぬやま
 若へ切られんとるるよ小田井が討ちかど鎧の袖は受流し
 込ふ又六郎再引組双方一世の力と勵し馬より組あがら小若ひ落
 る捨令小若、廣瀬御左衛門逸教小馳まう鳥若と助んもせ
 じ小田井がると在来い飛まうて鳥若小若とけり我も音し小
 違りば小田井がるといふあり汝も大将が首と得る時日の荒言
 と遠ふあうとが小若と助下と音捨顔おる敵の中小切て入る小
 田井も若兩人と鳥若声し上はあう下あう三五度迄は
 が難なく鳥若小田井と引敵首と捨く上るる小田井が家士

狹川弥八郎主の討とるるなりとり當の敵と討んと馳まう不
 と廣瀬御左衛門馳まう狹川と一カ小切て落と鳥若小田井が
 首とる計塔を小結ひ付列込んとるるよ、極防敵中を極
 此強ととあひて突うると鳥若身とくへ引廻人で二本まで
 引取捕り敵十五六人と叩き殺し又兜頭と接切て勝修
 敵ふ廣瀬鳥若と赤目の荒言小違はざら大は称し強ひ若
 も強河も小をひ強ひも石抱へ捨ひ板垣が組の中小入は曲瀬在
 九所と改名と

小田井合戦の事を用武軍記前編は来女に記され
 其後武田龍馬之助信繁大將まで板垣強河守日向大和寺
 頼茂が本城と責る時曲瀬は左衛門組の中にも討小勝れ

高名一天文十三年小笠原勢と信濃戸石合戦の時、陰下の言、
 首と取事三級、同十月上杉憲政が、藤下の子金賀、中守同
 六郎と大将として、新田、越前、山上、井、恐深、若五耳、龍橋等三子
 結人、雄井、味、陣、一々、板垣、駿河、も、系、系、た、信、門、日向、大、和、小
 山、田、た、ま、信、射、小、山、丹、後、守、七、子、結、人、と、發、向、合、戦、と、成、り、
 時、曲、淵、在、た、信、門、一、番、餘、と、入、る、事、と、念、し、思、ひ、大、軍、中、は、突
 入、彼、擧、を、尽、さ、つ、た、ま、と、ば、上、杉、勢、大、軍、と、い、え、も、曲、淵、在
 た、信、門、廣、濃、卿、九、門、三、科、肥、前、守、が、勇、氣、を、強、ま、り、と、山、本
 守、敏、と、大、軍、中、は、味、より、東、の、方、小、退、落、さ、れ、て、故、走、は、世、時、魁、首
 二、級、と、取、組、兵、と、討、事、數、を、以、其、も、六、ヶ、所、の、と、負、り、駿、河
 守、が、黒、白、食、を、取、り、御、と、廣、濃、三、科、と、同、く、名、に、と、成、り、大

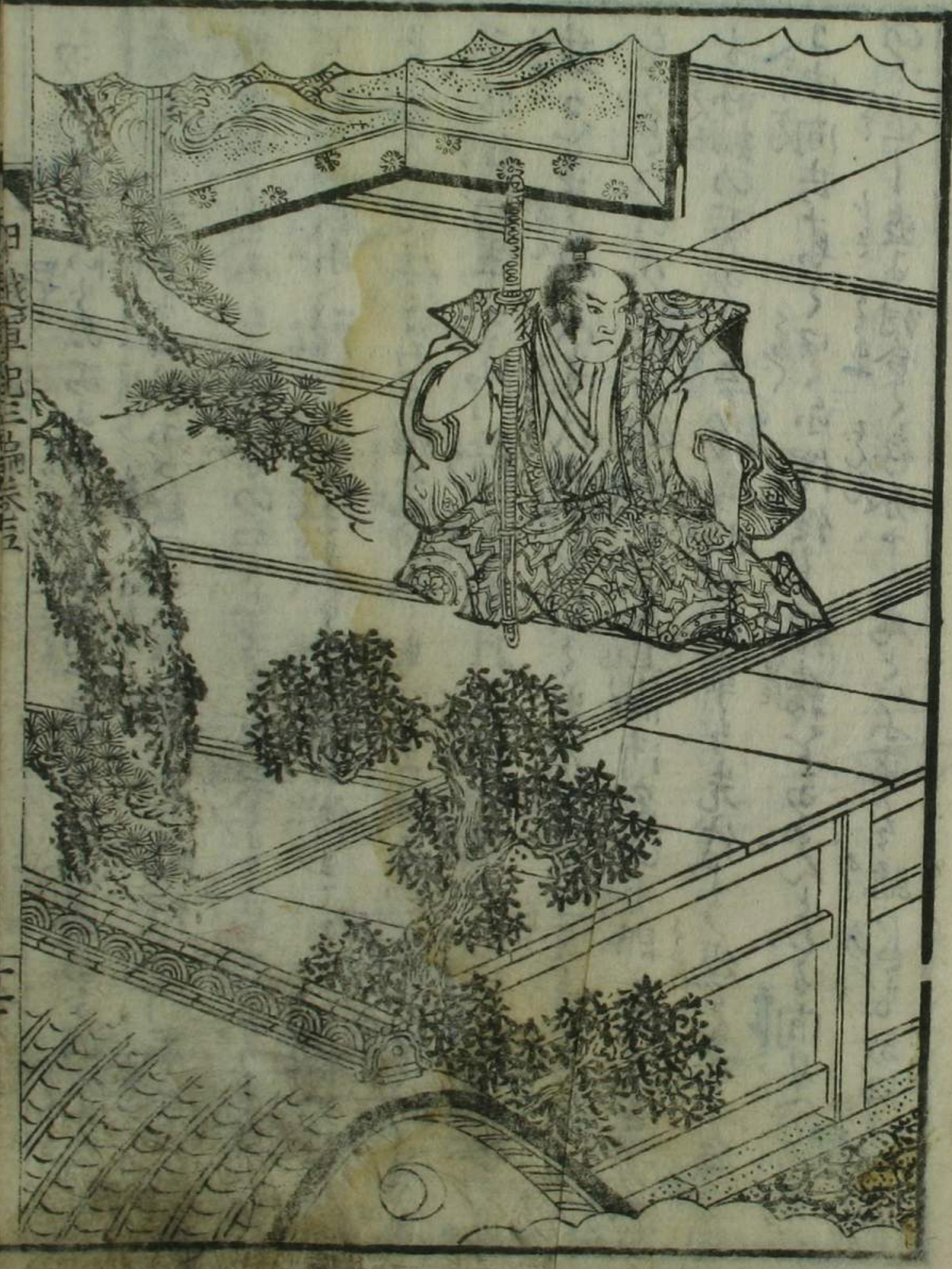
將の感状、慶養と得ふこと、度ありと、と、甲州、緒、將、と、付、さ、る、
 組、氣、の、知、り、を、假、令、百、費、の、者、と、内、五、十、費、と、名、田、と、号、し、世、内
 より、少、の、奉、貢、と、出、は、是、と、後、孫、と、稱、し、又、と、其、組、の、大、將、の、知
 り、又、結、ん、で、下、さ、る、例、あり、板、垣、が、組、武、百、人、も、又、新、の、結、然、る、小
 駿、河、守、曲、淵、が、武、逸、と、愛、し、渠、一、人、が、後、孫、と、免、し、合、力、の、心、は、よ
 く、取、ら、ざ、り、し、が、駿、河、を、死、て、後、其、子、孫、治、郎、が、代、は、至、り、曲、淵、が
 後、孫、と、も、他、の、組、氣、と、等、し、く、居、出、と、さ、き、由、と、若、と、曲、淵、と、又、駿
 河、守、代、より、揚、り、上、と、先、代、の、如、く、揚、る、べき、肯、と、さ、し、孫、二、郎、の
 父、の、代、中、ら、曲、淵、の、合、力、あり、我、亦、と、駿、河、守、代、と、遠、い、今、を、
 船、の、沖、家、廣、く、あり、ぬ、れ、諸、傍、事、へ、對、し、人の、用、小、も、さ、ん、と
 と、れ、が、知、り、や、さ、る、後、孫、と、知、り、取、り、合、力、と、る、不、得、さ、し、其

上合戦も音のゆく度くあられば武達覺への人もたゞで入用さ
 曲測が合カ又強河ももるもあれ某が代中を其るふにとも
 十人曲測が方々付て目く僅候とれど人と虫とも思ひざる曲測
 まづ一切是は驛馬で殖と出とことあられば中宮共大は怒り朝
 集り時とるといふも教と一飯とも殖とに今日も是れは飯と
 獨つて一とくは曲測頭とあり汝等と振る積ほどあれは何と
 て僅候と受べき一飯とも振返さずみあはるにこそ取合ひば
 中間共腹とま飯と殖ととんば狼藉と致とまきとて小器れ
 曲測所くとお笑ひさうへん小任世は積積あゝゝゝ致せ小器
 中々取合ト直は板垣殿とお合々存か小世人との眼と也
 しといひれば小者等も曲測が勇気小思れ頭とて人強福へ
 顔と花氣と告ぐとて花法師といふ者も強慾のてとわ移く助
 ととれども武道の事と不案内の者もあれ曲測が剛
 名地も遠くはく僅候の中間共告口と有の中へ小板垣は告げ
 曲測が不法と捨置けり作の細氣中を月夜悪くおひく細頭
 言小房くひやうあまき間程も強く内僅候あまき由と告は壯士
 此弥作即見と聞くと大は憤り頭の巾條と互れ却て悪言と吐く
 此言語同くあれ作の細氣中を亦も回目ありとて二百餘の組
 被官と列杯は曲測と呼ぶ討回一紙や其方へ殿錢と出さ
 却て其は存分と理人と争ふ實は抑限法僅候の事と其は知
 仍の事あり又強河守殿が其方へ當分合カせりあゝゝゝ
 我亦今程も其は氣と付合其上諸方、似合しき順義も實合カ

由越軍日記三編卷五

上合戦も音のゆく度くあられば武達覺への人もたゞで入用さ
 曲測が合カ又強河ももるもあれ某が代中を其るふにとも
 十人曲測が方々付て目く僅候とれど人と虫とも思ひざる曲測
 まづ一切是は驛馬で殖と出とことあられば中宮共大は怒り朝
 集り時とるといふも教と一飯とも殖とに今日も是れは飯と
 獨つて一とくは曲測頭とあり汝等と振る積ほどあれは何と
 て僅候と受べき一飯とも振返さずみあはるにこそ取合ひば
 中間共腹とま飯と殖ととんば狼藉と致とまきとて小器れ
 曲測所くとお笑ひさうへん小任世は積積あゝゝゝ致せ小器
 中々取合ト直は板垣殿とお合々存か小世人との眼と也
 しといひれば小者等も曲測が勇気小思れ頭とて人強福へ

甲越



日本書紀卷之三十五

曲測強勇
 無法能同



甲越軍言三卷五

沖籠の所へ曲淵所と殺さるたふんへ技指と放つとも他のを小技
持たぬ振子とて飲届兵部少輔系集人兩人と戦ふたは備つが
傍事集を人の中條と大将の沖耳小達一曲淵と罪一殺るべ
き由と頼めども曲淵事も大将も皆秘蔵の者あれば怒りをも
押へ肉分までうりつあるべしと省きとも弥治郎殿より長
坂た備州松部大次分が宿所小終て曲淵が指藏の事と終る
此事も飲届系は昔々執次と戦ひていとも大将の沖心は時ひ
ころ者あれば中がうりつあるべしと不礼はるとも若くも
捨ておの義よに者も見習ひいうほど不礼はるとも若くも
心得他の者までの風義は揚りい家ま殿取次有て渠が不法
と沖成彼ありうりつ由限る小終られは兩人の戦ふは飲届系は

諾

沖籠の心と存せざるも是は敵中らん曲淵居どの者も籠本は
りふよ及び甲信上の三州うけても三子も三千も有る曲淵已も
かしの強さと鼻小うけ主又寄親小討した振の面は其頭の下
知と居る條其曲とあり今程も形儀作法と肝要とあるが
とは世事沖耳小達一あが大暗曲淵も沖成彼ありうりつ由
とて長坂松部中がて此事も大将は告られは勝信も切がより
る笑ひあどらうりつ由は三十三の時の時分は約の四十八十
の人より美ある沖性質あり一り曲淵がやうとせし強ひ腹と
抱へく大は笑つせられ振く曲淵所を物と知ぬ如くは長太の如
ある者ぞうりつ物とて大といふものも善悪の差別と
可憐小掃除くは花壇と己が信小躰と朝夕權持

旗

日成道三編卷五

十七



板垣弥治郎
君と眼
退出
同



甲走屋言三巻五

ほたへ

慢

攻

四三〇ウ
呼のり
三三三
三三三

公とぞく一燦燦と咲く花花草と踏倒しかへ迫るほど小主人
 杖をよき是と追拂ふととれれば己まが狼藉あふと鼻又敵
 ととくせし其退ふ者も味くくろく影不歎と相も又鹿猿狐
 うけつていさだよれものあり曲測所も其かくまろ十三年小田井が
 城と妻一時は廣瀬猪子三科曲測餘下のる名と影一妻な
 欲と実宿一明日城責の評議あり時廣瀬六大将の馬と取
 んと言曲測も大将の首と取んとと荒言せしが果して廣瀬六
 大将小田井が馬と奪ひ曲測も小田井が首と取れぬなりて旗
 紡織中が長柄二本と取人十又六人と殺し独侍の首と搦切り
 糸の如く筋のえぐる首と持あるも麻も早今追又二十箇不
 能と夢あるとまかりあのおちる者二備の中小二兩人宛あれは石

はまぬき

底

611

鉄

者共等も嗟くあのかくも梅とらへし主や寄親よととめれ
 ても大事をとして群外よれ者多く出ある者あれば弥治郎
 胸とさうて捨盡べしと作ありれば弥治郎も大将の仲間
 と聞くと程瀧小根と不肯あると果も一方は大将を夢あ
 某と茂小一無法の言とはく曲測と愛一糸が祈へと捨給ふ
 偏小某と擲し給ふ故あべし某といふは悪さを給ふも
 父駿河守の武功か義小免せられあれた某がありのを理
 わりとも中分とま給ふべき小是れ我理あつた曲くた地と
 傍若無人の曲測が中條と採給ふと安うら孫其上父駿
 河もも満れば父家の孫哥と眼とて討北でも偏小大将は捨
 殺し給ふがあつた小力義の志と存ども終ふかき

日 本 書 院 蔵 本

父が老義といひて勝らんや終末れも少き事ぞしと我付とて
 楽まごらん板垣が組の中小孫法五郎た忠つとら者孫治郎
 が不仕の色とあふし心と慰んふ痛ふ陸奥といふ持女と
 勤めおれば孫治郎は遊女と得てより軍車小鳥う被陸奥と
 深く寵をこしうけ遊女は元敵後の者小て長尾が問答あり
 何ぞ小孫治郎が大將と恨酒色小籠ると何ひ言と巧く武田家と
 眼させようく女心を勤められさしその孫治郎も陸奥が毒
 舌小迷ひ竟し長尾家よ心と傾け法福寺舎戦の園公脱し
 うふし我う海情りき

池清

繪本甲斐軍記三編卷之五畢

